

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月28日現在

機関番号：17701

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22510270

研究課題名（和文） モンゴル高原における土地制度と移動牧畜の実践をめぐる実証的研究

研究課題名（英文） An empirical research on land system and practice of mobile pastoralism in Mongolian Plateau

研究代表者

尾崎 孝宏（OZAKI TAKAHIRO）

鹿児島大学・法文学部・准教授

研究者番号：00315392

研究成果の概要（和文）：

本研究はモンゴル高原における土地制度と移動牧畜の実践の関係性を解明するため現地調査に基づく比較研究を実施し、以下の2点が明らかになった。

1. モンゴル国南部においては、従来事例報告が多かったモンゴル国中部とは異なった土地占有の在り方および牧畜モデルが存在すること。
2. 内モンゴル中西部においては、研究当初に想定していた以上に多様な要素が現地の牧畜モデルに影響しており、結果として内モンゴルにおける牧畜実践の現状の多様性に関する知見を広げることが可能となった。

研究成果の概要（英文）：

This research carried out a comparative study based on field researches to clarify the relationship between land use and practice of mobile pastoralism in Mongolian Plateau.

As a result, followings were made clear.

1. In southern part of Mongolia, there exist a unique practice of land possession and a model of pastoralism, which are different from those of middle part of Mongolia, where some preceding studies were carried out.
2. In mid-western part of Inner Mongolia, various elements, some of which were not supposed at the beginning of the research, affected on local pastoralism. As a result, we could widen our view on the current diverseness of practice of pastoralism in Inner Mongolia.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
2012年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：複合新領域

科研費の分科・細目：地域研究・地域研究

キーワード：モンゴル高原、移動牧畜、土地制度、災害、鉱山

1. 研究開始当初の背景

近年、モンゴル国における土地の私有化、とりわけ現在まで私有の認められていない放牧地を私有化する議論が高まるにつれ、モンゴルにおける土地利用に対する学術的関心が分野を問わず高まっている（例：JIRCAS・国連大学共催ワークショップ「社会・環境条件の変動下におけるモンゴル国の牧畜業の現状と発展方向」、2008年3月）。

しかし、そこでなされる議論の多くはモンゴル高原地域（地図参照）の地域的多様性を捨象した、とりわけ制度と現実を同一視する論調が支配的である。たとえば、放牧地の私有化が制度的に完了した中国内モンゴル自治区は季節移動の消滅に伴う環境悪化の典型地域としてのみ表象され、一方でモンゴル国の牧畜業を変革するためには制度変革が不可欠である、という議論が存在する（上記ワークショップ）。

他方、近年文化人類学の描くモンゴル牧民像には優れた現状描写が存在し、土地にかかわる制度面にも触れられている（例：風戸真里「モンゴル国における土地私有化政策とローカルな実践」2008年、小長谷有紀「中国内蒙古自治区におけるモンゴル族の牧畜経営の多様化：牧地配分後の経営戦略」2001年）。

だが上記のような従来の研究は、1)実践に関わるローカルな論理と比べ、制度がある程度まで有しているはずの現実に対する規定力に関する言及が少ないため両者の関係性が明確でない、2)調査地がモンゴル国中部や中国内モンゴル自治区東部などに偏在しており、データの地域性を解釈しモンゴル高原全体を議論するには不十分である、という限界を抱えている。

またこのような、制度面との非接合性や面的な解釈の困難さは、文化人類学的成果に対する他分野からの言及の低さの一因であるとも考えられる。なお、この点については、海外の研究動向についても同様である（例：Caroline Humphrey and David Sneath, *The end of nomadism? : society, state, and the environment in Inner Asia* 1999）。

2. 研究の目的

本研究では上述のような現状にかんがみ、従来フィールドとして選択されることが稀であったモンゴル国南部、および国境をはさんで隣接する内モンゴル自治区中西部を主たる対象とし、加えて申請者らが従来フィールドとして研究を手がけている地域を比較対象として現地調査に基づく実証的な研究を行うことを目的とする。

より具体的には、モンゴル高原における土地制度と移動牧畜の実践の関係性を解明するため、次の3点に着目する。

(1) 土地制度の実効性：国家レベルの規定と地方行政レベルの実践を対照する。

(2) 住民と土地制度：土地の権利書などの取得状況・土地に関する認識を明らかにする。

(3) 土地利用の実態：季節移動、水資源・草資源の確保、固定施設の利用状況について、年較差も含めて明らかにする。

研究期間内（3年）のうちに、鉱山開発ないしは人口増加で現実に牧地の狭小化が進んでいる複数のエリアを対象として、現地調査および既存の調査データを収集・分析する。それにより、モンゴル高原における土地をめぐる制度の規定力および地域偏差の実態に関して基本的な見通しを得ることを目指す。

3. 研究の方法

モンゴル高原における土地制度と移動牧畜の実践の関係性を検討するため、1) 鉱山開発にともなう土地の狭小化が認識されているゴビ地域に新規の調査地域を設定して現地調査を行うとともに、2) 都市周辺の人口増加に起因して土地の狭小化が認識されている既存の調査地域のデータと比較作業を行う。

2010年度においては、研究代表者の尾崎は研究統括および事例調査地域（以下「調査地域」）と既存調査地域（以下「既存地域」）との比較を行う。研究分担者の上村はモンゴル国における土地制度の研究および同国南部の事例調査、中村は中国側の事例調査を実施する。

2011年度においては、各調査テーマにおける研究項目については2010年度と同様である。ただし作業配分としては、土地利用の実態に関する個別調査データ収集により重きが置かれ、現地調査では牧民を対象とする戸別調査を主として行う。その他のテーマ・研究項目については追加調査的な位置づけとなる。

2012年度においては、年度の早い時期に、中間発表として内モンゴルでのワークショップを開催する。そして、その成果および新規の調査成果も含めて年度後半に国内で成果発表会を開催するとともに、最終成果報告を刊行する。

4. 研究成果

1) モンゴル国南部における実証的研究

モンゴル国ドンドゴビ県を中心としたエリアで現地調査を実施した。当該地域においては国家側からの積極的な制度制定はなされていないものの、都市周辺や鉱山などにおいて、地方政府主導で実質的な土地占有がなされる事例が見られた。ただしその形態は、従来事例報告が多かったモンゴル国中部と

は必ずしも同一ではないことが明らかになった。

またその結果としての土地利用の実態についても、特に乾燥度が強く、平年においても相対的に移動性の高い牧畜を実践する必要があるという環境要因が強く働き、モンゴル国中部とは様相の異なる牧畜モデルが提出できた。

そして、こうした複数の牧畜モデルが面的に、どのように分布しているのかを明らかにすることが今後の課題であることが明確となった。

2) 内モンゴル中西部における実証的研究

内モンゴル自治区四子王旗を中心としたエリアで現地調査を実施した。当該地域においては、土地制度への影響を当初想定していた要素のうち都市化は顕著であったが、環境政策や鉱山開発の影響は比較的小さく、逆にそれ以外の要素として観光開発や研究施設、軍隊などの土地利用が相対的に大きな影響を及ぼしていることが明らかとなった。

その結果として、土地制度と牧畜実践との関係性も、従来報告されている他地域のそれとは異なった様相として描き出されることとなり、内モンゴルにおける牧畜実践の現状の多様性に関する知見を広げることが可能となった。

また本研究の成果として、内モンゴルにおける牧畜モデルは比較的多様性が少ない可能性が示唆されたが、その実証は今後の課題である。

3) 内モンゴル自治区でのワークショップ

2012年6月30日にフフホト市内蒙古大学経済管理学院・内蒙古大学蒙古学研究中心・鹿児島大学主催の国際シンポジウム「牧畜地域における制度と実践」を開催し、本科研の研究成果を発表するとともに、シンポジウムの趣旨に賛同した内モンゴルの研究者10名が研究発表を行い、総合討論を実施した。

そこでは内モンゴル特有の状況として、地方政府が実施する学校の統廃合など、必ずしも土地政策や牧畜政策とは直接的に関係しない政策が住民の移動を大きく規定するファクターとして機能していることが確認され、こうした新しい観点も含めてさらに多地域の比較研究を進めていくことの必要性が指摘された。

4) 国内での成果発表会および成果報告

2013年4月14日に奈良女子大学で日本沙漠学会沙漠誌分科会研究会「モンゴルにおける災害と人間活動の変容」を実施し、本研究課題の参加者（研究協力者を含む）すべてが研究発表を行うことで成果発表会を兼ねる

こととした。なお本研究会は従来2013年3月に実施される予定であったが、沙漠誌分科会の運営上の都合により、年度を越えての実施となった。

また本研究会での各報告者の報告内容は、2013年度中に『沙漠研究』誌上に論文として掲載される予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計8件)

1. 尾崎孝宏、モンゴル国牧民における副業としての鉱業—ドンドゴビ県の事例より—、人文学科論集、査読無、77巻、2013、37-51、<http://hdl.handle.net/10232/16461>
2. 尾崎孝宏、牧地争いをめぐると実践—中国内モンゴル自治区の1事例より—、人文学科論集、査読無、76巻、2012、19-34、<http://hdl.handle.net/10232/14499>
3. Kamimura, Akira、Pastoral mobility and pastureland possession in Mongolia、N. Yamamura, N. Fujita, and A. Maekawa (eds.) Environmental Issues in Mongolian Ecosystem Network under Climate and Social Changes、査読あり、2012、187-203
4. Kamimura, Akira、On the Change in Cartography of Mongolian Maps of Banners and Qing Administration in Mongolia、H. Futaki, A. Kamimura, E. Rabdan and L. Chuluunbaatar (eds.) Монголын орны газрын зураг болон газар нутгийн нэрийн судалгааны асуудлууд、査読無、2012、1-16
5. Kamimura, Akira、Estimated Impact of a New Pastureland Law on Pastoral Mongolia、Олон улсын монголч эрдэмтдийн X их хурлын илтгэлүүд、査読無、3巻、2012、34-37
6. Kamimura, Akira、Монгол улсын бэлчээр сэлгэх нүүдэл болон бэлчээрийн эзэмшил、Багжаргал, З., Фүжита Н., Яамаура Н. (eds.) Монголын нүүдлийн мал аж ахуй экосистемийн сүлжээ、査読無、2012、467-487
7. Ganbold, M. and Kamimura, Akira、景觀に刻まれた歴史—20世紀初めのアルタイ・オリアンハイ左翼副都統旗の地図について—、Husel B. and Imanishi J. (eds.) The History and Culture of Mongols in the 20th Century: Collection of Treatises in the 2011 International Symposium in Ulaanbaatar、査読無、2012、234-242
8. 尾崎孝宏、内モンゴル牧畜における土地

利用の現状—四子王旗, 農牧境界地域の事例—、人文学科論集、査読無、73 巻、2011、1-25、
<http://hdl.handle.net/10232/10547>

[学会発表] (計 11 件)

1. 尾崎孝宏、自然環境利用としての土地制度に起因する牧畜戦略の多様性、日本沙漠学会沙漠誌分科会研究会「モンゴルにおける災害と人間活動の変容」、2013 年 4 月 14 日、奈良女子大学
2. 上村明、モンゴル国牧畜世帯における移動と生計、日本沙漠学会沙漠誌分科会研究会「モンゴルにおける災害と人間活動の変容」、2013 年 4 月 14 日、奈良女子大学
3. 中村知子、社会主義時代におけるモンゴルの雪害対策—制度と実践分析、日本沙漠学会沙漠誌分科会研究会「モンゴルにおける災害と人間活動の変容」、2013 年 4 月 14 日、奈良女子大学
4. 尾崎孝宏、モンゴル高原における遊牧の歴史：災害・交易・オトル、日本地理学会 (2012 年秋季学術大会)、2012 年 10 月 07 日、神戸大学
5. 尾崎孝宏、土地制度に起因する牧畜戦略の多様性—中国およびモンゴルの比較検討、国際シンポジウム「牧畜地域における制度と実践」、2012 年 6 月 30 日、金歳大酒店 (内モンゴル自治区フフホト市)
6. 中村知子、モンゴル国における社会主義的移動式牧畜—自然現象に対する国家制度と人々の実践より—、国際シンポジウム「牧畜地域における制度と実践」、2012 年 6 月 30 日、金歳大酒店 (内モンゴル自治区フフホト市)
7. 尾崎孝宏、近現代における人間活動の変遷—草原利用を中心として—、日本地理学会乾燥・半乾燥地域研究 G、日本沙漠学会沙漠誌分科会合同研究会「多様な視点からみるモンゴル研究—深化を求めて—」、2012 年 1 月 9 日、早稲田大学
8. Kamimura, Akira and Mönggöinhü, Ganbold、History Inscribed on the Landscape on a Manuscript Map Representing the Territory of the Jütgelt Lord's Banner of Altai-Urianhai Produced in the 1910s、The Fourth International Symposium in Ulaanbaatar: The History and Culture of Mongols in the 20th Century - (招待講演)、Aug. 16, 2011、モンゴル日本センター (ウランバートル市)
9. Kamimura, Akira、Power and Maps - Governmental View to the Mongolian Land in the Second Half of the 19th

Century and the Beginning of the 20th Century -、International Academic Workshop: Tradition of Manuscript Maps in Mongolia under Qing Rule and the Bogd Khaan - Cartography and Onomastics - (招待講演)、Aug. 14, 2011、МУИС (ウランバートル市)

10. Kamimura, Akira、Estimated Impact of a New Pastureland Law on Pastoral Mongolia、The 10th Congress of Mongolian Studies、Aug. 11, 2011、МУИС (ウランバートル市)
11. 尾崎孝宏、制度実践の民族誌的記述の試み—内モンゴル牧畜社会における「禁牧」政策の事例より、日本文化人類学会第 45 回研究大会、2011 年 6 月 11 日、法政大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

尾崎 孝宏 (OZAKI TAKAHIRO)
鹿児島大学・法文学部・准教授
研究者番号：00315392

(2) 研究分担者

上村 明 (KAMIMURA AKIRA)
東京外国語大学・外国語学部・研究員
研究者番号：90376830

中村 知子 (NAKAMURA TOMOKO)
東北大学・東北アジア研究センター・
専門研究員
研究者番号：80513887